

## 大島鎌吉のオリンピック運動（その五）

—一九六二年随想「もう一度省みよう！」の展望について—

伴 義 孝

### 緒言

通常のところ記念誌出版や著書出版への寄稿文を依頼されれば、美辞麗句を並び立てる「ご祝儀甘言」を書く。しかし大島鎌吉（一九〇八—一九八五）の場合は異なる。とりわけスポーツ文化を左右する団体や個人から頼まれたとき、あるべき責務「スポーツする心」を果たしていないと見積もるなら「あるがまま」を冷徹に追及する。

当時のわたしの気持ち（スポーツする心）の中にはふたつの要請があった。ひとつは社会を見つめての人的要求である。他は日本のスポーツの今後の歩みのため純粋なアマチュアの路線設定を必要と見たからである。後者のためには時の体育協会を潰してもよいと思っていた。<sup>①</sup>（補注傍点今次）

大島の問う「ひとつは」とは、戦前の模倣文化「国策厚生運動」（厚生はレクリエーションの和訳）としてではなく、戦後復興期における「占領下政策で獄舎につながれている生物ギリギリの人的要求」に応える新しい生活文化「レクリエーション」を意味する。一九四七年十月二十七日、大島が先頭に立って日本レクリエーション協議会を立ち上げた。協議会は翌年三月に財団法人日本レクリエーション協会となる。大島は理事を二期務めたあと後進に託して、

大島鎌吉のオリンピック運動（その五）

—一九六二年随想「もう一度省みよう！」の展望について—（伴）

一九五一年に辞去する。そののちは日本体育協会のあり方を見守った。また右に問う「他は」とは、大衆スポーツ（基底）の振興に目もくれず、一九四九年の体協が「金メダル（尖端）至上主義」を掲げたことを指示する。

戦後すぐからの大島は異名「駿台のスポーツボス」をとるほどに体協批判を書き捲った。一九六四年までの体協は駿台（お茶の水）に所在した。そのための異名で正論を追求する新聞記者「スポーツボス」として畏れられる存在だった。副題に掲げる一九六二年随想<sup>①</sup>は一九四九年以降の体協の不作為責任を糾弾する典型事例である。大島は二年後に迫る第十八回五輪東京大会を控え「東京オリンピック選手強化対策本部」の総括責任者だった。なぜ大黒柱が内部「体協幹部」の批判なのか。本稿ではその理由にも切り込んで生き方「ものの見方」の問題について議論する。

一九六六年十一月十八日、日本レクリエーション協会は『二十年史』を上梓した。高度経済成長期の協会は厚生省や大手企業との連携で「労働組合対策レクリエーション」に加盟し協会は潤沢であった。そのためか同書への寄稿文は大方が甘言になっている。前出の引用文には「体育協会を潰してもよい」と書いてある。実は掛け言葉で協議会創設当時の抱負を逸脱した「一九六六年の日本レクリエーション協会」をも「潰してよい」と警告したのである。

その後、時は経過した。だがレクリエーション運動が新しい時代の社会的要請を前に、きのうもきょうも常に、いくつかの課題をもっていることを忘れてはならない。（同前、傍点今次）

文中の「その後」の「その」は一九四七年をいう。当時は「レクリエーション協議会」も「大日本体育会」も戦後復興期に寄与する抱負を始動させようとしていた。さらに両者とも画期的な大島「尖端と基底の環流」構想に同調して連携を強化しようとしていた。しかし連携は一九五〇年に終止符を打つ。経緯は後述するものの、ここに「体協糾弾」の発端がある。特定の文化運動が形骸化する過程には理由がある。本稿では、この問題について、一九六二年の大島随想「もう一度省みよう！」（以下「一九六二年大島随想」という）を読み解くことにおいて議論したい。その

さい一九六二年の大島邦訳書『ピエール・ド・クベルタンオリンピックの回想』<sup>4</sup>（以下「大島邦訳書」という）を下敷きにする。また大島ジャーナリズムの視点を随所に配置し、そこへ本稿の問題意識を相乗させて考察を深める。

### 一、敗戦革命という視点

クーベルタン（一八六三～一九三七）は近代オリンピックの始祖である。だが現代人の多くが誤解しているように世界最大のスポーツイベントを創造するためではなかった。ところでオリンピック理念「オリンピックイズムOlympism」は、普仏戦争（一八七〇―一八七二）でのフランス敗戦を受けて、敗戦革命の「環」「青少年育成運動」として十九世紀末のフランス青年クーベルタンが着想したのである。近代化路線の最大の過誤は戦争で、戦争の最大の犠牲者は青少年である。実のところ青少年をこの負の連鎖から救い出すために近代オリンピックを復活させたのである。斯くしてクーベルタン理念に共振する大島「駿台スポーツボス」が一九六二年の「体協」を糾弾することになった。そうであれば大島存念「敗戦革命という視点」を読み解いておく必要がある。存念の筆勢は歴史観に照らして鋭い。

第二次世界大戦（一九三九―一九四五）のあと「戦争中に開発された原子力、エレクトロニクス、オートメ」を平和利用し「過去の産業経済発展の一〇〇年」を「一年」にした「圧縮革新」が地球上に登場した。圧縮革新「電化、機械化、省力化」は「楽をして良い暮らしを！」の「人間の願望」を逆手にとって「運動不足」を蔓延させる。大島はそう見定める。生活する人間は生命原理「動く」と同時に知性原理「考える」の両義的存在である。そうであれば圧縮革新「知性原理」が助長する生命原理「動く」の人工的な拘束は、健康問題だけでなく、生き方の問題として欲望と結託するとき、生活、社会、倫理の領域にまで弊害をもたらす。斯くして大島は技術革新の問題に注意する。

圧縮革新が日本列島に上陸すると、台風のように風速を増し、政治・経済・社会・文化・思想・教育など全領域

にわたり、明治革命、敗戦革命に劣らぬ激変を連動させた。技術革新は双刃の剣である。プラスの増はその分だけマイナスを生む。わが国ではプラスに性急で、マイナス防止をネグった。<sup>5)</sup> (傍点今次)

今回の議論は右に大島の問う「敗戦革命」に力点を置く。実はクーベルタンも「敗戦革命という視点」に重心をおいていた。二十世紀になると欧米諸国ではオリンピックをも対象論理で捉え国威発揚や経済成長の道具立てとして利用してきた。一九三一年のクーベルタンが「孤独な哀切」を回想している。一九九二年十一月二十五日の聴衆はクーベルタン講演「近代オリンピックの復活計画」に「賛同した」もの実は誰も本意を理解していなかった。そのさいの誤解は哀切のまま「その時に始まって久しくずっと融けなかった」のである(大島邦訳書一七頁)。クーベルタン著作『オリンピックの回想Memoires Olympiques』は一九三一年に新聞紙上で発表された。<sup>6)</sup>だが「融けない孤独」はその後も生涯に亘って続く。見世物もどきのオリンピックは十九世紀中葉の欧米で既に開催されていた。近代オリンピック復活計画との差異は何なのか。一八九二年の人心は近代合理主義(商業主義)に馴化しつつあった。差異の源泉がそこにある。近代化「進歩成長」路線は技術革新を基軸にして進展する。斯くして大島自身もまた、進展のみを追求すれば片手落ちになると説いて、終生を「孤独な哀切」と闘った。大島箴言に注意しておきたい。

「技術革新(近代化路線)の負の連鎖(マイナス)を放置するな! マイナス防止を怠るな!」

戦後の大島は指標「怠る偷安を許すな!」を掲げ孤高の「オリンピック運動」を追求した。一方で十九世紀末のクーベルタン理念は二十世紀中葉のこの大島用語「マイナス防止」と等質の思想的反省「敗戦革命という視点」を核心に据えていた。他方で日本は戦前も戦後も「プラスに性急」で「マイナス防止」を無視してきた。実是一九六二年の大島は、両者間の乖離「歴史的現実」を埋めるため、ひとまず「体協幹部」を槍玉にあげたのである。

オリンピック東京大会を迎えるに当たっては、理念に向かつての努力が要請されていると思う。いつまでもパン

パン政治でも官僚主義でもあるまい。スポーツは若いエネルギーを相手として常に生きているのだ。(一九六二年大島随想「もう一度省みよう!」の段落5、以下の同随想引用では段落番号のみ書く。傍点今次)

随想は八〇〇字ほどの短文で六段落の構成になっている。本稿では段落番号を付し議論の受け皿として随所に援用する。六段落を順番に並び替えれば全文になる。ところでこの「一九六二年大島随想」は、関係者が一瞥するのであれば、「だれ」と「なに」を批判し、「どこ」を反省せよと追及しているのか一目瞭然である。もともと大島は「だれか」を悪者仕立てにするために書いたのではない。そうではなくて、戦争責任国「日本」における「然るべき敗戦革命」を怠る不作為責任を公然と追及することに眼目があった。論点を整理してみる。

明治革命以来の日本社会は、西欧文化の受容にあたって、文化発祥の原点問題に注意することなく、直接に目に見える表層面の有用性論理を選択基準にしてきた。結果的に「いいとこどり」の「単なる模写文化」を直輸入したことになる。学術もそうであった。スポーツ文化も然り。しかも享受者の生き方「ものの見方」を無自覚のまま変容させる。「三重の危機問題」が封じ込まれていた。即ち西欧文化の鵜呑み、その無批判、前者二点を野放しにする儉安である。実にこの三重の危機問題「鵜呑み・無批判・儉安」は二〇一八年の現代社会にあっても払拭されていない。

三重の危機問題の捉え方において生き方「ものの見方」の両極化が始まる。一つは近代合理主義「知性原理」の視点「対象論理」で例えば「スポーツ」を物象的に捉え、他は生命原理「スポーツする心」の視点「実践論理」から周縁現象を捉える。現代社会では前者を近代化「進歩成長」路線の象徴に見立てて肯定的積極的にさえ評価する。ここに近代合理主義の隘路がある。大島は「後者」の視点から「前者」を顕わに追及した。もとより現代社会へ浸透する過剰な対象論理「物質主義」へ対決する布石である。対象論理「知性原理」は物象化という視点へ過剰に偏向すると生命原理を歪めてしまう。総括すれば近代政治、近代経済、近代教育はその対象論理を理論構成の根幹に据える。

そのため大島ジャーナリズムは生涯にわたって「政治、経済、教育」の動向を追及し是正を要請した。こうした大島視点を読み解いて議論するためには、「大島来歴」と「大島歴史観」の少しを確認しておく必要があるうか。

振り返れば大島は、監督兼団長としてドイツ遠征中に第二次世界大戦の勃発「一九三九年九月一日」に遭遇し、選手団を日本へ見送ったあと、現地志願で六年間におよぶ毎日新聞ベルリン特派員に就いた。そのさい生涯の師と仰ぐカール・デイーム（一八八二～一九六二）との対話基地を構築し、さらに一九三六年刊行のデイーム編ドイツ語版『クベルタン オリンピックの回想』(Olympische Erinnerungen)を熟読吟味した。戦後は「対話基地」と「熟読吟味」を懐刀にして「駿台スポーツボス」に徹する。あるべき敗戦革命に取り組む大島視点が、近代オリンピック創始から半世紀後の一九四九年、戦争の助長する「近代オリンピックの破局的な要素」を確認して歴史観を一新させる。

われわれは既に戦前戦中のあの歪められた日本人的、また後進資本主義国家的な思想や感情を洗い落としていて、純粹な理性による批判が可能となっている。しかるに外界は決してそうではない。政治的にも経済的にも鉄のカーテンを境として明らかに二つの世界が形成されつつある。この様相は主張する二つの理性（戦勝国論理の米ソ）にも感情的曇りのあることを認めなくてはならない。したがって冷静に（敗戦革命として）これを批判する資格をもつのは敗れた日本であり、ドイツである。だからわれわれが、いま、スポーツの世界でオリンピックを批判すること、ならびに正しいオリンピックの在り方を検討し提唱することは文化的な意義をもつと確信する。それがある意味では世界に対して日本のもつ責務であり使命ではないだろうか。<sup>(8)</sup>（補注傍点今次）

この論文「近代オリンピックの検討」（以下「一九四九年大島論文」という）の執筆前年には第十四回ロンドン五輪が開催された。一九四六年十二月四日、日本オリンピック準備委員会が結成され大島も幹事に列し五輪参加を模索した。結果的に敗戦国「日独」は拒否される。斯くして大島論文が「ロンドン大会は戦勝国の祝賀大会の形」で開催

され「平和運動として高揚されるオリンピック精神なるものにガンのあることを認めなくてはならない」と指弾する。このような国際状況のもと一九四九年から一九五三年にかけて日本の時代精神が敗戦革命を放棄し戦前の旧思想「戦勝国論理」へ回帰させる事件があった。経緯は後述する。実は日本体育協会までもが付和雷同したのである。

## 二、一九六二年の体協批判

大島にとっては「責務と使命」が敗戦革命の実践課題である。斯くして一九六二年大島随想が「いつまでもパンパン政治でも官僚主義でもあるまい」と迫る。ここではその大島随想が載った出典に関して概観しておく。

出典は時の東京都知事「東龍太郎」の著書『オリンピック』<sup>(9)</sup>である。出版は二期目選挙の一年前「一九六二年五月十七日」だった。同書には寄稿文「オリンピック余話三十五篇」が掲載されていて、三十四篇は選挙応援しながらのだが、異色の大島随想「もう一度省みよう！」だけは著者「東龍太郎」と当時の体協会長「津島寿一」をパンパン政治と敢えて批判した。戦争は人格を拘束する。生きるため統治者「アメリカ兵」へ手をふる、街娼を「パンパン」と呼んだ。米国のスポーツ文化を彩るチアリーダー「ポンポンガール pompon girl」を振った和製英語である。大島「驍台スポーツボス」は占領行政「戦勝国論理」や権力構造に媚びて手をふる人物や団体をパンパン政治と見做したのである。あるべき理念を追求しない日本体育協会へのこの孤独な対決姿勢は大島の生涯をとおして変わらない。

姓名は符帳であろう。姓は別として名は親がその時のヒョットとした思いつきで定めることが多い。妙な面倒な名になると選挙の時不利だというので親の意志に反して勝手に変える連中も、最近は随分いる。<sup>(10)</sup>（傍点今次）

このさいの大島筆鋒は「東龍太郎」を言い当てている。一九五八年に発覚する「オリンピック後援会事件」の詳細は後述するものの、その事件に連動して日本体育協会の会長「東龍太郎」と専務理事「田畑政治」<sup>(11)</sup>を含む四名が国会

特別委員会で喚問された。国会が「体協にも責任がある」と追及した二ヵ月後「一九五八年十二月二日」に東龍太郎が体協会長を唐突に辞任する。理由は「都知事選挙へ立候補する」ためだった。そのさい新聞では「東竜太郎」として発表された。右の引用文は一九六九年の大島回想だが、文中の皮肉「選挙に不利」は公職選挙法上の立候補名「東竜太郎」を揶揄するものである。東龍太郎が体協会長にとどまるなら「オリンピック後援会事件」の追及を避けることが難しくなる。連動して時の政権にも不都合がおよびかねない。こうも見定めれば大島ならずとも「東龍太郎」の体協会長辞任は「雲隠れ」で、「東竜太郎」の都知事選立候補は政権がらみの「粉飾工作」だと憶測がつく。

東龍太郎の著書『オリンピック』の表紙は「第十八回東京オリンピック第一号ポスター」だけ、を全面に配し、背表紙と中扉に書名と著者名「東龍太郎」が読み取れる。粉飾表記である。だが奥付と文中表記のすべては東竜太郎で、肩書「東京都知事・IOC委員」を明記したうえで、例えば一九五九年五月二十六日のIOCミュンヘン総会「招致都市決定投票日」で「われ勝てり」と招致主体者「東京都知事」の責任を果たした、自負が書かれてある（二三〇頁）。表紙全面には「日の丸」の下に「五輪マーク」があしらわれ、底辺に横文字「TOKYO 1964」がいずれも等尺比率で描かれてある。一九六二年といえば巷間にその斬新なデザイン「第一号ポスター」が溢れていた。こうした情況証拠を突き合わせば、東竜太郎著作『オリンピック』は選挙違反に抵触するとみてとれる。そればかりではない。

東京五輪招致運動の最終段階に至って東龍太郎と田畑政治も責任を指摘された「オリンピック後援会事件」が発覚した。実は「後援会」をめぐる日本体育協会には「とかくのウワサ」があった。斯くして一九六二年大島回想が改めて民意「公憤」を代表して糾弾することになる。理由はまだまだある。根源は日中戦争（一九三七―一九四五）の動因となる一九三二年の満州事変にまで遡るのだが、とりあえず一九五八年情況から紐解いてみる。

### 三、第三回アジア競技大会

一九五八年四月七日、大島が九日前の三月三十日に完成したばかりの国立競技場に託して論説記事を書いた。

国立競技場は落成式を終つていま五月に行われる第三回アジア競技大会の開幕の日を待っている。新装の競技場にはアジア二十カ国千七百のスポーツ青少年が集まるが、これがわが国で行われる初めての総合的な国際競技である。もっと遠くをながめると東京は一九六四年度の第十八回オリンピック競技をここに招こうとしている。

新聞記者大島は「後援会募金不正使用のウワサ」を熟知している。予感も働いて論説記事が核心を衝く。

課題がないわけではない。競技場が動き出す前に早くも何か不安なものを感じられるからである。立派な住家には、そこに住む人がそれにふさわしい人柄であることが望ましい。この競技場を使う人、とりもなおさずスポーツする人の「スポーツする心」が果たしてそれにふさわしいだろうか気になるのである。（傍点今次）

オリンピックズムは「オリンピックク」を単に開催するために着想されたのではない。そうではなく例えば「一九六四年東京五輪」を祝福するためには如何なる布石が求められるのか、その布石「環境整備」を具体化するための哲学的原理が「オリンピックズム」なのである。大島は「オリンピック精神」とか「オリンピック主義」とか、もつとくだけて「スポーツする心」とかとも意識する。本稿も大島に倣う。クーベルタンがその間の事情を端的に説明する。

「誰が見ても解るとおり（オリンピックズムは）オリンピック競技に関する（例えば華美な競技場を造るとかの）改善策には言及していない。むしろ、オリンピック、競技をとりまく環境を清浄化し、（戦争回避の努力を）もつて競技はつきりと大きく独り立ちできることを願つて、つくられた」（大島邦訳書一九九頁・補注傍点今次）

斯くしてオリンピックズムの核心は戦争回避の平和論理「環境整備」にある。クーベルタンは理想実現を目指す営為を

歴史、編纂「環境整備」に譬えてオリンピックズム「スポーツする心」の實踐課題に定めた。大島論説記事が問う。

アジア競技の前に東京で開催のＩＯＣ総会（五月十四—十六日）は、これらの底辺の問題のうえで盛んな論争を繰り返すであろう。こんな空気を外に国立競技場は立派に出来上がった。それは近代的な誇るべき施設である。しかしながらこれを日本の体育・スポーツのメッカとして生かすか、それとも単なる争闘本能の角逐場化して精神的な廢墟にするかはスポーツする心の問題であると思われる。（補注傍点今次）

第三回アジア競技大会は第十八回オリンピックアード東京大会の招致運動「歴史編纂」の一環として企画された。先立つて開催された第五十四回ＩＯＣ東京総会も歴史編纂のため東京都が請負った。右に大島の問う「底辺の問題」はそのＩＯＣ総会における議題「大衆スポーツの振興」をいう。前出の大島「尖端と基底の環流」構想は十年も世界に先駆ける類例のない文化運動「歴史編纂」だったのである。この問題は体協批判の裏づけとして後段に詳述する。

おりしも第三回アジア大会組織委員会（津島寿一会長・田畑政治事務総長）が来日中の各国ＩＯＣ委員の不評を買いかねない失態を重ねてしまった。ところで東竜太郎の著書『オリンピック』では、「第三回アジア競技大会」の小見出しをつけ、成功談として「参観した各国ＩＯＣ委員を感動させ、日本の実力を強く認識させるのに役立った」と臆面もなく書いている。確かに表層面だけなら成功したかにみえる。だが内実は正反對だったのである。

アジア大会を開会したばかりで、早くもこんな不始末を露呈するようでは、世界的な規模を持つオリンピック大会の招致など思いもよらない。運営当事者は、深く責任を感じ、重ねがさねの失態を会期中につぐなうて、よくやったと満足できる気持ちで閉会を迎えるよう（スポーツする）心をとりのみおすべきだ。（傍点補注今次）

一九五八年五月二十七日、毎日新聞の社説がこう書いた。社説は大島執筆だとみてよい。大島「駿台スポーツボス」は追及するだけでなく「救いの手」も差し伸べる。この社説もそうである。しかし関係者は隠蔽工作に走って「スポ

「ツツする心」を「とりなおす」ことができなかつた。こんな「不始末」はなぜ起こつたのか。大島社説が続ける。

観覧席内外の混乱は、無計画な切符発売によるもので、場内は収容人員の限度を越えて不慮の惨事をはらむ。また切符を持ちながら、入場できない人が開会当日から二日にわたつて数千人におよんだ。こんな道徳にはずれた切符の売り方は、営利主義の催しにも例をみないことではないか。修学旅行の日程に大会見学を組み入れて、早くから入場券を手に入れていたのに、ついになかへ入れなかつた生徒たちの心を傷つけるものはなほだしい。

記者会見で組織委員会の田畑事務総長は、前売券の過剰発売について、「組織委の手落ち」を認めつつ釈明する。問題は「座席のナンバーを指定席のためと考えたのは我々の間違いだつた」と煙幕を張るかのような官僚的答弁に終始した（六月二日・毎日新聞朝刊）。他方で新聞追及は的確で「国立競技場の収容人員は、東京消防庁が設計図によつて調べたところでは、五万五千人が限度とわかつた」と原因を突き止めている。ところが「組織委員会では七万人と踏み、同委員会の白石総務部長も定員オーバーを認めている」と取材が見破つた。この追及記事は田畑記者会見の前日「六月一日」の毎日新聞朝刊「社会部週間解説」が報道した。こうして新聞論調も世論も懐疑的に終始した。

大島論説記事「国立競技場に望む」も見出し「世界に誇る近代施設」をつけ「七万人が入る」と絶賛した。そうであればこのアピールは偽装となつて国内外を欺くことになる。のみならず前売券不正販売を公表したのは一年後発行の『第三回アジア競技大会報告書』<sup>1)</sup>である。報告書は顛末について「団体の一部に収容不能という事態をおこして多数の児童生徒の夢をこわし、大きな混乱を招いてしまつた」との記述に留めている。しかも田畑事務総長が編集後記に「印刷したのは奇しくも一九六四年の第十八回オリンピックアードが東京開催に決定した五月二十七日であつた」と謎めいた弁明を書く。総合的に判断するなら報告書自体も大会組織委員会の隠蔽工作だつたとみてよい。

大会が始まる前にもオリンピックズム「スポーツする心」に悖る二つの事件があつた。一件は都心のホテルを借り切つ

て「選手村」に充当した問題である。選手村は各国選手団の不評を買った。もう一件は大島社説に訊いてみる。

あろうことか、(選手村の埋め合わせで) キャバレーなど遊興場のサービスを、各国選手団に配るといふ、非常識な接待をしたことが問題になった。酒色をつつしむべき選手たちへのもてなしとしては、当を得ていないばかりか、女性選手の存在に考慮を払っていなかった証拠であり、まったく無礼というほかはない。(補注今次)

そのうえ大会後の十二月二十八日、政府も関与するこの国家的事業で大失態「アジア大会選手村(ホテル)の宿泊代金未払い事件」が露呈し、後援会問題を再燃させる事態となる(毎日新聞朝刊)。アジア大会組織委員会には「ウワサの真相」の全責任者が名を連ねている。こうして本丸「日本体育協会」へ飛び火しかねない展開となった。

#### 四、オリンピック後援会事件

一九五八年七月三十一日、日本体育協会が「後援会」を唐突に解散させる怪事件があった。斯くして新聞が注視する(毎日新聞当日報)。五月十三日に東京五輪招致に向け立候補した矢先だった。先手を打って「後援会隠し」を画策したのである。しかし却って「オリンピック後援会募金不正使用事件」を発覚させることとなった。

後援会は日本体育協会の財政機関として一九五四年に発足したのだが、当時から募金使途不明が問題視されていた。一九五二年五月十九日、時の東京都議会は、一九六〇年の「国際オリンピック大会東京招致に関する決議」<sup>12)</sup>を行った。趣意書が「独立日本が、国際社会の一員として、再出発するに当たり、わが体育文化を平和愛好諸国民と交歓し、国際信義と友愛の確立に貢献することは、最も時宜を得たものと信じる」と宣揚する。結果的にイタリアのローマに決まるのだが、東京は立候補七カ国中の最下位だった。実はこの立候補を受けて一九五四年に「後援会」が発足している。発足させたのは「日本体育協会の東龍太郎会長と田畑政治専務理事」である。国会喚問がそうだと確認した。

事件発覚時の後援会会長は外務大臣藤山愛一郎で事務局長が佐藤昇である。佐藤は戦後すぐの贈収賄事件「五井産業事件と昭電事件」に連座する贈賄側の人物だった。時の吉田茂首相の率いる自由党を巻き込む大事件である。国会も看過できない。一九五八年十月十七日、藤山愛一郎、東龍太郎、田畑政治、佐藤昇の四名が喚問された。喚問は佐藤昇を名指して「事務局長に推薦したのは誰か」と追及し「体協にも責任がある」と追った。しかし前回敗退の挽回を期す「一九六四年の東京五輪招致」を最優先させ真相解明は捨て置かれた。大島は追及する立場にある。だが招致運動も放置できない。実は最終段階になって日本体育協会の招致運動実動部隊が暗礁に乗り上げていた。そこで新聞記者「大島」が誰にも思いつけない救いの手「オリンピック運動」を展開し助け舟を出す。仔細は後述する。

東龍太郎会長の突然の辞任については既に書いてある。辞任劇は日本体育協会にもおよぶ。会長辞任から二十五日後の十二月二十七日、残る二十二人の体協理事が総辞職した（二十八日・毎日新聞朝刊）。この時間差辞任劇には東龍太郎の責任隠蔽を図る政権と地位保全を図る体協の打算が一致した。こうして「腐敗構造の解決」は封じ込まれてしまった。年の瀬も迫つての総辞職が手の内を語っている。一九五九年一月十日、三月定期改選までの暫定理事二十三名が決まる。新理事会は専務理事に旧皇族の竹田恒徳を選び、会長を置かずに会長代理も兼任させた。追及をかわすためである。そのさい田畑政治もまた雲隠れのため理事に就いていない（一月十一日・毎日新聞朝刊）。

翌年三月の定期改選後も同じ布陣で反省も課題も先送りのままだった。実に日本体育協会はレームダック状態を自演したのである。朝日新聞の元政治部長だった田畑はこうした手際に長けている。ともあれ関連するすべての不祥事は日本体育協会の「理念の足らず」が引き起こしたのである。理念の欠如は如何にして始まったのか。戦前も大日本体育協会時代の平沼亮三（一八七九～一九五九）が副会長として活躍した当時は「理念」に充ち溢れていた。当事者のひとりとして一九六二年の大島鎌吉が平沼の率いた「毅然とした体協」の如何について核心を伝えている。

## 五、政治に勝利した戦前の体育協会

一九三四年四月二十五日、第十回極東選手権競技大会（現アジア大会の前身）の代表選手が合宿中に反対派「十余人の暴漢」に襲撃される事件があった。一九六二年大島随想に経緯を訊いてみる。

スポーツ以外のことを多少とも考えたのは昭和九年、極東選手権大会（会場地マニラ）で参加不参加をめぐって日本の世論が両断し、何れかを自分で決めなくてはならぬ時くらいであつたろう。満州国の極東体協加盟問題をめぐって、時のいわゆる青年将校を中心とする参加反対派が、われわれ選手の合宿所（いまはない甲子園のスポーツマンホテル）に、ある夜暴力団の撲り込みをかけた春であつた。国会もこれを問題にした。（段落2）

一九三二年三月一日に満州国が建設され、国際的認知を獲得するため一九三二年の第十回五輪ロサンゼルス大会への選手派遣を模索したのだが拒否された。そこで一九三四年第十回極東選手権マニラ大会への参加を画策する。だが中華民国が反対し紛糾する。紛糾は日本軍部が「ならば日本も大会参加を拒否せよ」と強弁したことに始まる。

いまでも思うのだが時の体協は毅然としてこれに抵抗して、警官護衛の下に参加を強行した。単に参加したいためではなかつた。問題の解決は現地の会議を通じてやる以外にはないと判断したからである。わたしたち選手は脱落者を軽蔑しながら一人一人が胸を張り暴漢と戦いながら肅々と船出した。（段落3・傍点67次）

一九六二年大島随想がこう振り返る。決行させたのは平沼亮三を中心とする体協である。五十四歳の平沼が団長を引き受けた。大島は選手団の選手兼コーチだった。時代相からすれば軍部までが反対運動を展開するとき、団長や選手になるのは安易でない。ここでは「関西大学大島鎌吉スポーツ文化アーカイブス」の所蔵する関連資料の一つを援用して解説を試みる。一つとは衆議院議員小林鐵太郎が書いたもので、「皇紀二千五百九十四年四月二十一日」の日

付のある「文部大臣閣下に奉る公開の書」および「大日本体育協会に呈する公開の書」である。小林は「代表選手は絶対に送るべからず。満州国を伴わずして日本が単独で参加すれば日滿両国民の融和を阻害し、かつ両国民の緊密不可分なる交友関係を破壊する。日本が参加すればリットン報告書を認める証左となる」と主張した。リットン報告書とは満州国の承認問題に関連する国際紛糾を調査するため国際連盟が派遣した一九三三年の調査結果である。

報告書は日本政府の主張を認めるものでなかった。かかる趨勢からして中華民国は満州国の極東体育連盟への加盟申請を拒否した。日本が参加すればリットン報告書を「裏書する」ことになって日本の国益を損なう。この論調が小林の政治的見解である。貴族院議員の平沼亮三にとって、小林主張は、政治的見解としても平沼自負に照らしても譲れることでない。大島も挑んだ一九三二年の第十回五輪ロサンゼルス大会では平沼が選手団長を務めた。そのさい日本は「一九四〇年第十二回オリンピックアードの東京招致」の意向を表明したところである。斯くして国会論争での平沼は第十回極東選手権競技大会への不参加は逆に日本の国益「五輪招致運動」を損なうと小林主張を論破した。

問題は国会論争だけでなく競技団体や大学自治へも波及した。注意すべきは一九三四年四月二十四日に大日本体育協会が世に問うた声明書（大島アーカイブス所蔵）である。事前の上海会議での満州国加盟申請は中華民国の反対で不首尾に終わる。斯くして国内世論が「日本も参加すべからず」の論調に傾く。だが体協は「声明書」を以て毅然と対応する。即ち「先般の上海会議を以て日本の完全なる失敗とし、之により大日本体育協会は、極東体育協会より脱退せざるべからずとなすものもあるも、その余りに短慮に失する論議たるや云うを俟たず」と反論した。そのうえで選手派遣を断行した。こうした毅然とした正義感が青年意識の特長であろうか。一九六二年大島随想に訊いてみる。

ことの善悪は自ら判断する者の見解による。だがこれ（第十回極東選手権競技大会への参加）が最善の道だと判断して自らの道を選んだわたしは今（一九六二年）でもそれが正しかったと信じている。その判断にわたしたち

を到達させたのは時の体協首脳部であつたろう。あの頃の若さ（精粹の青年意識）がいつまでも生きて、ことに時に妙な感慨がわくが、事実はその通りである。（段落4・補注傍点今次）

クーベルタン理念「オリンピズム」の追求する青年意識とは「若々しく成長した人」（大島邦訳書二〇五頁）に表現される生き方の問題をいう。実に民間のスポーツ団体が時の政治に立ち向かつて勝利した事例は、この一九三四年の正義感「青年意識」が内発させた平沼行動以外に存在していない。斯くして大島「青年意識」が同調する。

## 六、内発する青年意識

報道は参加辞退者の続出や愛国青年連盟などの度重なる反対行動を克明に伝えている。そんななか「反対派の撲り込み事件」があつた。合宿所では「極東大会に出場の陸上代表選手は二十六日午後七時四十分から選手会議を開催し、各選手は（大会参加へ向け）一致の行動をとるべく意志を固めた」ことも報道された（一九三四年四月二十七日・大阪朝日新聞朝刊）。選手会議には大島などのコーチ陣も参加した。大島は三月に関西大学法文学部法律学科を卒業したばかりである。関西大学では「学友会有志が極東大会参加選手引上げ声明を出すよう学長へ要請していた」（同前）という逼迫した状況のもと、学生の長尾三郎（槍投げ）と谷口睦生（一〇〇メートル）が大島と共に大会へ参加した。

「正義を権力から護れ」

関西大学のこの建学の精神が三人を決意させた。後年の大島がそうだと語る。三人の決意はオリンピズムの標榜する「精粹の青年意識」に通じている。ここでは一九六二年大島随想の第一段落を読み解いておかねばならない。

選手の頃は、何ということはない、勝たなくちゃならないという気持ちで精魂をつくして戦った。（青年意識の内発させる精粹の）すべてがこの目的のために注ぎ込まれた。オリンピクの憲章だとか、アマチュアリズムだと

か、その他凡百の規則や規程は知るわけもなく、ただ選ばれてユニフォームを着け、歓呼の声を浴びて遠征し、現地ではコンディションを整えて試合に参加し、かいつぱい戦つたに過ぎない。(段落1・傍点補注今次)

実のところ既に学生時代の大島はクーベルタン理念を日本へ伝えている。そこに大島オリンピックズムの原点がある。では一九三四年の体協絶賛と一九六二年の体協弾効は何故なのか。原点は最後の第六段落に連動する。

その故にこそ、(クーベルタン提唱の近代オリンピックは)二千年のブランクを越えて(古代)ギリシアから現代に復活したのでろう。(段落6・一九六二年大島随想の結語・傍点補注今次)

この三十数文字を書くために第五段落では一九六二年当時の体協首脳部の不作為責任を追及した。一方で第一段落には逆説的に「力いっばい戦つたに過ぎない」と書き添えてある。実に「過ぎない」は反骨精神が書かせた謙遜にほかならない。このさいの反骨は青年意識の特性「正義感」が内発させる生き方の問題として捉える必要がある。

金沢商業卒業に際し大島は「各大学から引っぱり風」だった。東京の「早大や慶応」が「学費や生活費をめんどうみるから来ないか」と誘ったが、「オレは金で買われる芸者ではない」と突っぱねた。他方で「何もしてやれないがうちの陸上部で活躍してほしい」という「関大」に魅力を感じて決めた。生涯を貫く反骨精神が既に表われていたと取材記事が強調している。決めた理由は二つある。東京への中央集権では日本が片肺飛行になる。だから関西との両輪駆動は欠かせない。理由の一つである。もう一つは関西大学の建学の精神に惹かれたためだという。一九三二年の大島は第十回五輪ロサンゼルス大会で銅メダルに輝いた。そのさいの反骨精神が書かせた特異な報告随想がある。

希臘のオリムピックを現在に再現したのが近代オリムピックである。それは假令體に於いて變革はあつても、四カ年毎にこの平和の祭典が、壯嚴裡に舉行されて、二週間の全世界の耳目は他の凡ゆる係争から完全に遮断されてしまふのだ。故にオリムピックは次の様なモットーを掲げる。The important thing in the Olympic Games is not

to Win, but to Take Part: と更に續け、' The important thing in Life is not the Triumph, but the Struggle; The essential thing is not to have Conquered, but to have Fought well. To spread these precepts is to build up a stronger and more valiant and, above all, more scrupulous and more generous humanity. (by Baron Pierre de Coubertin, Founder and life honorary president of the Olympic Games)。委員會は「このモットーを金科玉條として「凡そ文明國は近代オリムピックに参加しなくてはならない」と云ふ。文明國は所謂「平和の使徒」を送つて華々しく戦わすのだ。近代オリムピックは、だが併し歴史的背景を一つの使命乃至目的を有するが故にこそ、現代に於ける價值ある存在なのである。(改行省略と傍点今次・大島用字法のまま全文引用)

アムステルダム五輪での金メダリスト織田幹雄と大島と南部忠平の三人で「金銀銅独占」と前評判が高かった。ところで優勝候補の大島が選手村のガス爆発事故で大火傷を負う。結果は「金メダル南部、銅メダル大島、十二位織田」だった。こうしたさい二十三歳の学生なら「無念だった」とかと自分事を書く。大島は違った。なぜなのか。一九三二年六月十四日、日本政府が満州国を承認した。おりからの世界大恐慌に際し満州での權益拡張は列強にとつて許せない。かかる国際情勢のなかオリムピック初出場の青年意識に平和の祭典が強烈に刻印されたのに相違ない。

二点に注意したい。大島報告随想「近代オリムピックに就て」はオリムピズム理念を完璧に表現している。しかも軍国主義時代にあつて学生が「オリムピックの平和論理」に焦点を絞つた反骨精神に驚かされる。一点はその青年意識の内発にある。文中の英文程度なら大学生は寧ろ和訳にする。しかしそうではなかった。なぜなのかが二点目である。英文は「選手村の食堂に掲示されていたもの」を大島が「筆記し資料として持ち帰つた」のである。大島をよく知るオリムピック研究家伊藤公がそう語り伝えている。そうであれば学生としては非凡というほかない。

書き出しの「一行」は一般的に「オリムピックで重要なことは、勝つことではなく参加することである」と直訳

される。実に一行はクーベルタンがある、文脈のもとに援用したもので直訳のまま独り歩きするとき安直な誤解を招く恐れがある。とりわけ「参加すること (to take part)」は、特に「個々の選手」だけを指示するのではなく、「文明國」が「平和の使徒」を送り込む意義に連動している。英文資料は三十年後の大島が邦訳し、一九六二年六月三十日に発刊された大島邦訳書の中扉を飾っている。二年後の一九六四年東京五輪を意識して邦訳発表を合わせたのである。

「…人生で最も重要なことは、勝つことではなくて戦うことである。本質的には『勝ったこと』ではなくて、けなげに戦ったことである。この規範の広く及ぼすところ、人間をより勇敢により強健にし、その上より気高くより優雅なものにする。ピエール・ド・クベルタン…」(大島邦訳書の「中扉」に仏文原典と共に収載・傍点今次)

名訳である。しかし「一行」は省かれてある。なぜなのか。マスコミや世間で「オリンピックは参加することに意義がある」と言い習わされている弊害を指摘したうえで大島一文が説明する。一九六四年三月一日のことである。

思うに、わが国では広く一般に、この警句をクーベルタンの言葉だと誤解しています。そればかりか「負けてもかまわないんだ、参加すればそれでよいんだ」といった大きく過った理解が行なわれています。事実はそのとおりありません。この警句は、神父ディドン(ママ)のものです。(一九〇八年の) 第四回ロンドン大会で新大陸米国の選手が旧大陸英国の選手をうち負かすべく見悪く争った時、見るに見かねた神父がこれはいかんと警告したのです。オリンピック大会ではともすればこの種の偏狭な愛国主義が現われ勝ちです。だからこの警句はいまも生かされているのです。(ルビ「ママ」の人名は大島の誤記で正確には「タルボット」。補注今次)

大島は一文を「オリンピックで大切なことは戦うことである!」と題し選手強化対策本部長名を以て発表した。このさい大島の問う「戦う」は七ヵ月後の本番のみをさすのではない。大島は一文に四点の注文を書き込んだ。

一、五人に選ばれて参加するに足る選手を育成しよう。(選手強化の目標設定・傍点箇所は本文九八頁を参照)

二、競技の場では正々堂々と戦い抜こう。(スポーツ選手の倫理目標設定)

三、勝敗はその必然の結果として現われよう。(スポーツ選手の努力目標設定)

四、勝敗の結果が国民体育の振興に肯定的にはね返つていくことを期待しよう。(五輪後の目標設定)

そのうえで青少年に向け「精神の精神」の如何を説き関係者へ檄を飛ばした。一文は次のように括られている。

どんな態度でオリンピックに臨み、その結果がどうなるかは直接わたしたち現場にある者の大きな関心事であることは言うまでもありません。しかし、それをあすの国民体育の振興に役立たせるかどうかは広く体育とスポーツに関係する人々の関心事でなくてはなりません。ことに、現在の責任団体の使命であると思われます。今度のオリンピック大会はこんな意味で日本の明日のためにまたとない機会を与えてくれたのです。(傍点今次)

一九六二年大島随想の問題提起「理念に向かつての要請」に應えるべき課題がここに集約されている。実は改めて日本体育協会へ釘を刺したのである。大島の問う「タルボット警句」についてはクーベルタンが補足する。

「:(アメリカ五輪選手の態度が險悪だったので)大会が始まる時にセント・ポール教会で礼拝式があり、ペンシルベニアの僧正(タルボット)は高い哲學的内容のある説教をした:(大島邦訳書九三頁・補注傍点今次)

こうしてタルボットに共感したクーベルタンが、一九三二年の大島五輪報告に書き込まれてある「英文」のように援用して、オリンピック運動「青年意識の涵養」の標語の一環として活用することになった。

## 七、三つ巴の葛藤

一九三六年の第十一回五輪ベルリン大会は近代オリンピック史上はじめて勃興した「ボイコット運動」に見舞われていた。本章ではこのボイコット運動に対する「ヒトラー」と「カール・デーム」と「IOC」とで展開された「三

つ巴の葛藤」の一端について議論しておきたい。まずは大島のデイーム素描に訊いておく。

デイーム博士はベルリン・オリンピック大会の開催に当り組織委員会事務総長として活躍し、オリンピックプログラムを今日の規模に整理したこと、スポーツと音楽と芸術を結びつけて開会式（実際には開会式当日の市街地劇場）でベートーベンの第九シンフォニーを演奏したこと、勝者にオリブの枝に代えて柏の木を贈ったこと、オリンピックヤとオリンピック都市を結ぶ聖火リレーを実現したこと、オリンピックの鐘を着想したことなど何れもオリ、ン、ピ、ッ、ク、の理想を実現しようとした試みであった。ベルリン・オリンピック大会以来、オリンピックの規模が一変したのは、研究者、オルガナイザー（デイーム）に理念があり、その理念を実現するだけの力があつたらである。不幸にしてこのことはそのまま評価されていない。ヒ、ト、ラ、ーが国威を宣伝するために行つた厚化粧が、デイーム博士が意図するもの以上に人目を引いたからである。（補注傍点今次）

併せて大島は「博愛主義者クーベルタン男爵のアマチュア観（スポーツ観）を理論づけたのはデイーム博士であつた」とも付記している。実はデイームの実現させた「オリンピックの理想」は一九三三年から一九三五年にかけてのクーベルタンとの「オリンピックを彩る文化的、デザインに関する度重なる会談」に負うところが大きい。如何なる事由のもとにスイスで隠遁生活にあつた当時のクーベルタンとの会談が実現したのか。事由は二十年前に遡る。

第一次世界大戦（一九一四—一九一八）に際して一九一六年の第六回五輪ベルリン大会は中止になつた。直接原因は戦争責任国のドイツにある。斯くしてドイツスポーツは「その汚名を払拭する」ために、また「青少年の自信を賦活させ」て「あすへの夢を持たせる」ために改めて五輪招致運動を展開した。結果として一九三一年に再び「ベルリン一九三六」を勝ちとる。ところで当時のナチス政党は五輪招致に反対であつた。しかしながら一九三三年一月三十日にヒトラー政権が成立するとオリンピック利用に一転する。同時にナチス政策「反ユダヤ主義」に反対してベルリ

ン五輪ポイコット運動が始まった。斯くしてIOCも苦境に立つ。組織委員会のデイーム事務総長は両者の仲介を執らなければならぬ。こうして「三つ巴の葛藤」が始まった。このさい三つ巴を緩和させたのがクーベルタンなのである。詳細を一九九四年公刊の『国際オリンピック委員会の百年』<sup>18)</sup>(以下『IOC百年史』という)が説明する。

一九三三年六月五日、IOC理事会がウィーンで開催された。焦点はベルリン五輪ポイコット問題である。そのさいヒトラー政権が誓約書を提示し「ユダヤ人をオリンピックから除外しない」と宣言した。この宣言がなければ「ドイツはIOCに留まらなかった」とデイーム日記が告白している。こうして三つ巴の交渉が続くなか、決定的な影響力を担ったのが「クーベルタンとデイームの会談」である。度重なる会談「文化的デザインの検討」において最終的にデイーム提案の計画が合意された。ところで原案は一九三六年ベルリン大会の「開会式にクーベルタンを招聘し立ち会ってもらふ」ことに絞られていた。実現すれば「お墨付き」になってポイコット運動を鎮める手立てになる。原案を実現させるためには「ヒトラー」もIOCの意向に同調せざるをえない。けれどもクーベルタンは頑なに拒否した。何故なのかを大島晩年の一九八二年回想(以下「一九八二年大島回想」という)に訊いてみる。

余談だが、清潔なクーベルタンは、(一九二五年の)引退後身を引いたままIOCやオリンピックに顔を見せなかった。顔を出すと、世間から会長など役員の地位が軽視される。このことを避けたのである。(補注今次)

そこでデイームはオリンピックプログラムの新計画「文化的デザイン」を一九三三年から三年間にわたってクーベルタンと相談した。一九三五年の「ベルリンでのラジオ五輪キャンペーン」でクーベルタンが演説を行う。デイーム発案「聖火リレー」のオリンピック出発式でクーベルタンメッセジ(録音)を発表する。ベルリン五輪開会式でクーベルタンメッセジ(録音)を発表する。上記三点についてクーベルタンの快諾を得た。ここにオリンピックを開催するための地均し「環境整備」が約束されたのである。こうして「ベルリン五輪」が祝福される運びになった。この

さい「祝福」とは単なる「開催」を意味していない。一九三六年八月一日、ヒトラーが開会宣言を行った。

「わたしは第十一回近代オリンピック・アードを祝福し、ここにベルリン競技大会の開会を宣言します。I declare open the Games of Berlin celebrating the XI Olympiad of the modern era!」(傍点今次)

直訳すればこうなる。国家元首の開会宣言は厳格に規定されている。変わるのはオリンピック・アードの回数と開催都市名だけである。ここでは「第十一回オリンピック・アード」の解釈が問題になる。近代合理主義「ものの見方」では即物的に「オリンピック大会」と意識し一九三六年八月一日に始まって八月十六日の閉会式までの開催期間をいう。しかし古代オリンピックでは祭典競技を契機に「四年間の祝福」を願った。戦争は回避すべきなのだから、オリンピック・アードを祝福することは四年間の平和維持へ期待することになる。古代ギリシアではその期待を「競技的信仰 religio athletae」と位置づけて崇拜した。実に一八九二年のクーベルタンはこの競技的信仰を蘇生させるため近代オリンピックの復活を提唱したのである。斯くしていつの時代にあつても戦争回避に払われる環境整備がオリンピック開催の優先的な実践課題なのである。そうであれば一九三五年のクーベルタンに直截に訊いておかねばならない。

#### 八、一九三五年ラジオ演説の歴史的意義

一九三五年のクーベルタンは、ベルリンへ招聘され、ドイツにおける「歴史編纂」を促すため、即ち一九三六年からのオリンピック・アードを無事に迎えるため、ラジオ演説(以下「一九三五年ラジオ演説」という)で呼びかけた。組織委員会が文化的デザインの一つ「ラジオ五輪キャンペーン」を開始した。一九三五年八月四日のことである。第一回目がクーベルタンの一九三五年ラジオ演説「近代オリンピックズムの哲学的原理」で、この企画の窮極の狙いは「ヒトラーへ演説を聴かせる」ことにある。クーベルタンが劈頭に述べる祝辞を以て意図を如実に代弁している。

「：わたしは現代曆による（一九三二年一月一日に始まった）第十回オリンピックアードのこの第四年目（一九三五年）に、（一九三六年一月一日に始まる）第十一回のオリンピックアードに対する準備の歩みを絶えず関心をもつて見てきました。（組織委員会の）準備は先を見越したすばらしい計画（文化的デザイン）に従い、全体に目を配り、細部にわたって行き届いた配慮を加えながら進められています。全ドイツには激しい熱望が燃えさかっています。かつてロンドン、ストックホルム、アムステルダム、あるいはロサンゼルスで美事な大会が開催されましたが、一九三六年の祭典が（五輪ボイコットを回避できれば）いままででない世界で最も美事なもののひとつになるだろうとの印象をうけています。この点についてすでに真の驚異（文化的デザインのIOC合意）が生まれています。年を越せば、復活祭の鐘が鳴り、これを合図に待ちかまえている選手たちが世界の隅々からベルリンのスタディオオンへやってくるでしょう。今日（一九三五年八月四日）いまからもう、わたしはドイツ政府とドイツ国民に対し、第十一回オリンピックアードを祝福するためにつくされた努力に感謝いたします…」（大島邦訳書二〇一頁・補注傍点今次）

この周到な祝辞には「古代」と「現代」の歴史的現実問題をオリンピックイズムの根幹「競技的信仰」を以て循環させる緻密で壮大な布石「環境整備」が仕組まれている。このさい大島邦訳書「訳者のことば」（二二頁）が説明する。

近代オリンピック競技を現代の世界最大の文化的事業に発展させるのに、クーベルタンがどんな布石を打つていったかについて、残念ながらあまりよく知られていない。これはまぎれもない事実である。（傍点今次）

例えば西欧文化の受容国「日本」では右のクーベルタン祝辞の冒頭二行目のように「補注」を書き込まないとき正確に理解できない。のみならず欧米にあつても布石「環境整備」を捨て置くととき正確に解釈されない。実はここに文化ギャップの問題が派生するのだから解説が必要になる。例えば「一九三六年第十一回五輪ベルリン大会」をIOC用例英語表記にすれば「Games of the XI Olympiad (Berlin 1936)」となる。クーベルタンもそう書く。このさい開

催都市も開催年も副次的記述にすぎない。古代オリンピックに倣うなら「Games of the XI Olympiad」が正式祭典競技名になる。そして祝福する名譽ある都市が「ベルリン」で、その祭典の「第一年目」が「一九三六年」なのである。斯くしてクーベルタンは、古代曆における伝統「オリンピックアド史観」を現代曆に蘇生させるため、即ちオリンピック競技を祝福するために準備されるあらゆる努力「環境整備」を現在進行形の「歴史編纂」に譬える。

「：わたしはさらに、歴史編纂がオリンピック競技の精神的行事の中で、詩歌と並んで高い位置を占めることを願っています。というのは、オリンピックは本来的事実(大島邦訳書二〇七頁)に寄っているからであります。」

精神的行事（文化的デザイン）は一過性に終わることなく歴史を循環させる道具立てになる。オリンピック開催都市はこのオリンピックアド史観に則って四年間にわたる歴史編纂の努力を要請される。実にクーベルタンは一九三五年ラジオ演説を布石「環境整備」として暗黙裡に「何をすべきなのか」とドイツ政府を諫言したのである。

このさいドイツ政府とは「ヒトラー」を指示し名譽ある歴史編纂へ「参画せよ」と説いたことになる。一九三五年十一月五日、前出の『IOC百年史』に由れば、組織委員会の調整で「IOC会長ラッセル」と「ヒトラー」の最終会見が実現した。そのさい公約「ベルリン大会の準備と大会期間中のユダヤ人差別を抑制する」が確認された。こうした一連の経緯に一九三五年ラジオ演説の歴史的意義がある。もしもこの文化的デザインが実現していなければ、クーベルタン理念「オリンピックイズム」の核心は公開される機会を永遠に埋没させていたかもしれない。なぜなのか。

## 九、希望の行方は

一九三五年ラジオ演説の説くオリンピックイズムの核心を要約すれば二点がある。一つは「競技的信仰」の生活的普及を目的として、他は生き方の問題として万人に宿るべき「青年意識」（高貴さと精粹）を高揚させるためのオリンピック

ク運動である（大島邦記書二〇―二〇二頁）。ここでは競技的信仰の問題を補完しておく。カール・デイムの創意で一九三六年ベルリン五輪から始まることになった新たな歴史編纂「聖火リレー」の事例を借りてみる。一九四九年大島論文が「近代オリンピックの弱さ」に照らして古代ギリシアにおける伝令故事について指摘している。

古代のオリンピックは四年毎に開催された時、伝令がペロポネソス半島の諸都市国家を布れて廻った。ひとたび伝令が通過すると各国は戦争を止めて小アジアから地中海沿岸の諸都市もこれに参加した。（五七頁）

この故事を「古代オリンピックの強さ」と換言するなら、歴史的現実的意義は、古代「強さ」と近代「弱さ」の乖離を埋める着想を故事「伝令」に做った聖火リレーの発案者デイムの実践論理にある。大島指摘に訊こう。

近代オリンピックでは却って戦争がオリンピックを休止させる。第一次世界大戦の際に第六回の大会が、第二次世界大戦では第十二回と十三回が中止の止むなきに至った。（同前）

近代オリンピックの弱さ「三回の五輪中止」は「ドイツと日本」の戦争責任に原因がある。実のところ一九三六年の第十一回ベルリン五輪も弱さ「ボイコット」に瀕していた。歴史編纂を繋ぐためにはどうすべきなのか。

ところで第六回オリンピックアードは、一九一六年にドイツのベルリンで祝福されるはずであった。クーベルタンに訊ねてみる。一九一四年七月二十八日に始まった第一次世界大戦は「ドイツの勝利ですぐに終わると信じていた」ため招致都市ベルリンは「返上しよう」としなかった。そのため「オリンピック集団（IOC）が分裂し消滅しかねない危機情況」に陥った。実は「イギリス世論」がドイツをあらゆる「国際的、学術的、科学的会議から除名せよ」と「ボイコット要求」を世界へ呼びかけていた。当時はまだオリンピック自体が国際的にさほど認知されていない。そこで連動してIOCへも「同調せよ」との外圧が深まった。外圧回避のためのIOC内での議論は戦争終結を待つて開催すべしとする延期説が主流となった。それではオリンピックアード思想が破綻する。この危機を突破させたのがクーベル

タン決断である。大島邦訳書には「戦争の四カ年」という一章があつて、決断の如何について特筆してある。

「…あるオリンピックアードは（不可抗力で）祝福されなくても仕方がない。だがそのオリンピックアードの回数（歴史編纂のために）数えなくてはならない。これは古代の伝統である…」（大島邦訳書一四〇頁・補注今次）

クーベルタンは古代史に倣つて柔軟策を選択した。斯くして近代オリンピックの理念「オリンピックアード思想」が認知された。他方で世界大恐慌の渦中にあつた一九三二年の第十回オリンピックアードは逆境を撥ね退け大成功だつた。こうして「オリンピック効果」の国際的認知が確固となる。ヒトラーがその確固に期待して一九三六年五輪を取り仕切ろうと乗り出したのである。ここに、一九一六年の危機情況とは違つて、史上はじめて直接名指しの「ベルリン五輪ポイコット運動」が起こつた。こうしてクーベルタン理念「オリンピックイズム」を世界へ広宣する必要が生じた。

呼応したのがデيلم企画「一九三五年ラジオ演説」である。ここでは文化的デザイン「聖火リレー」に注意してみたい。古代ギリシアでは「伝令が通過すると都市国家は戦争を止めた」のだが、この故事にデيلم構想「聖火リレー」の原点がある。十九世紀後半のドイツでは、戦争をも肯定させてしまふ観念主義の横溢に対決し、原点を古代ギリシアに求め「あるがままの生」を再創造する「生の哲学運動」が始まつていた。実にクーベルタンとデيلمの青年意識にも同じ哲理が働いた。このさい「青年意識」とは何なのか。改めてクーベルタン理念に訊いてみる。

「…オリンピック大会は単なる国際的な選手権大会ではない。全世界の青少年のため、人類の春（近代化路線の基調『心身二元論』を打破する『肉体と精神の再婚』に拠つて培う青年意識）のために四年毎におこなわれる祭典である。大会は名誉心を鼓舞する情熱的な努力の祭典であり、生命の門口（青少年時代）に、さしかかつた若い世代の活動欲の形象に対する祭典である。かつてその昔作家や芸術家がオリンピック（祭典）に集まり、古代の各種スポーツの周囲を取り巻いたことは偶然の現象ではなかつた…」（大島邦訳書八〇頁・傍点補注今次）

祭典は「競技」だけに留まらない。祭典に「集まる」という競技的信仰の生まれるところ「文化的デザイン」も必然的に「青年意識」に促されて広がる。そうであれば現代人も青年意識「人類の春」を高揚する環境整備に取り組まなければならぬ。こうして一九三五年ラジオ演説が「あるがままの生」を再創造せよと説くことになった。

「：人間の春は若々しく成長した人の中に表現されるのです。オリンピック競技はこの若々しい成人を祝福するためにおこなわれなくてはなりません。そしてそのリズム（青年意識）は、未来と過去の調和ある関連を支配しているのです、これ（オリンピック競技）を正しく維持しなくてはならない：」（大島邦訳書一〇五頁・補注今次）

維持さえすればオリンピックは現代にあっても古代にあっても「信仰である」ことにおいて生活的に具体化する。実に一九三六年からは競技的信仰を象徴する聖火リレーの継続「歴史編纂」が現実となった。この文化的デザインの成功を以てクーベルタンは希望を深める。十九世紀末のヨーロッパでは「スポーツ競技」を本質的な厳肅さと相容れない「芝居じみた示威運動」としか評価していなかった。しかし古代ギリシアで崇拜された競技的信仰の真相を徐々にはあるが認識するようになった。斯くしてクーベルタンが競技的信仰の生活的定着に希望を膨らませる。

「：競技的信仰については、文化民族の教育面で、新しい人間社会づくりの基柱となる人道と民主政治が関心をもっているばかりでなく、科学もまた関心をもっている。科学の絶え間ない進歩は、心身の調和のとれた青少年育成に好ましい影響を与え、これまでの近代教育の誤りを是正してくれる：」（大島邦訳書一〇二頁・要約）

このように第二次世界大戦前のクーベルタンは樂觀的にさえ「教育と政治と科学」へ希望を託していたのである。

#### 十、永遠の未完成交響曲

一九三六年の第十一回ベルリン大会はドイツにおける歴史編纂という意味においてクーベルタンの見届けたかぎり

大成功だった。ところで一九三六年のクーベルタンは『オリンピックの回想』の続編「未完成交響曲 La Symphonie inachevée」を書き始めていた。<sup>20</sup> 絶筆ノートが「私のオリンピックイズム Olympism はまだ半分も約束されていない」と告白する。なぜなのか。理由の大半は一九三五年ラジオ演説での説諭において暗示してある。ここでは決定的な理由を探ってみる。一九三六年大会における「ヒトラー開会宣言」を以てひとまずヨーロッパに巢食う危機構造は緩和された。クーベルタンは他方でアジアに巢食う危機構造に思いを馳せたはずである。ヒトラー開会宣言の前日一九三六年七月三十一日、IOCベルリン総会においてアジアで初めて開催される「東京一九四〇」が決定した。しかし国際情勢は予断を許さない。一九三一年「満州事変」および一九三三年「日本の国連脱退」を契機にして国際世論は日本批判を強めている。こうして一九四〇年東京五輪ボイコットが高まる機運にあった。斯くしてクーベルタンはオリンピック平和運動の連帯展望「歴史編纂の国際的協調」を続編に書こうとしたのではなかったか。

もう一つ決定的な理由がある。前出のクーベルタンとデイム会談ではクーベルタン著作の「ドイツ語版一九三六年出版計画」が相談されたはずである。実現した同書には現代日本の慣行になっている「発行日」が書かれていない。経緯からすれば「一九三六年一月一日」に始まるベルリンにおける「オリンピックアド暦」に合わせる出版計画「歴史編纂」だったはずである。この文化的デザインも相乗して危機は一時的に凌げた。ところが一九三七年七月七日に日中戦争が始まって「一九四〇年五輪ボイコット」が熾烈になる。このさい隠遁生活者には「回想の続編」を書くことくらいはできない。だが二ヵ月後に棚上げとなった。一九八二年大島回想（一七八頁）に訊こう。

IOCがノーベル平和賞の候補に押しとどめるとき、クーベルタンは毅然として断った。火薬、ダイナマイトなどで大金を儲けた戦争商人。つみほろぼし基金にツバを吐いたのだ。引退後全財産をハタいて無一文になった彼は、ジュネーブにわび住いをした。一九三七年九月二日、ラグランジェ公園のベンチに腰を下ろしたまま、静かに息を

引きとつた。ときに七十四歳だった。彼は人類にオリンピックという壮大無比の遺産をのこして逝つた。

公園ではアジア初の五輪開催へ思いを馳せ続編を構想していたのに相違なからう。このようにみてくれば、戦争との関係においても、あるいは経済戦争との関係においても、クーベルタン理念「オリンピックイズム」は永遠の未完成交響曲となる。そうであれば誰かが引き継がねばならない。日本では戦争の世紀を生きてきた一九〇八年(明治四十一年)十一月十日生まれの大島が敗戦革命という視点を以て埋め合すすほかない。一九四九年大島論文が問う。

古代オリンピックの模写は近代オリンピックの始祖が永い歴史の変遷を無視して古人ギリシアの土のものをそのまま欧州の近代国家群のスクリーンに投じたことである。クーベルタン男爵の情熱と偉功はノーベル賞受領に値するものであつたに相違ないが、その夢は現実と時代の進歩にその直視を欠いた点で、歴史家教育家としての彼の本領を疑わせるものがなかつたであろうか。(五七頁・傍点今次)

大島のこの物言いは、現代人の生き方「ものの見方」が、クーベルタン時代に比べ、「政治・経済・教育」への志向性を一層と合理化させた経緯に対する逆説的表現である。斯くして一九四九年の大島が新生日本へ問いかける。

学生がスポーツ界に君臨し、スポーツが学生と一部特権階級の玩弄物となつてゐること。スポーツが国民のものではなく、一般のスポーツ観が自ら実践するものでなくて専ら見るものであること。さらにスポーツ行政がピラミッドの底辺(基底)を白眼視して一途に選手であるピラミッドの尖端のみ眺めてゐること。これらの(西欧文化の受容過程において)ゆがめられた形は一刻も早く矯正されなくてはならぬのである。私はここに問題だけを投げた。これが解決はわれわれ自らの手によらねばならぬことは明らかである。(同前五九頁・傍点補注今次)

結語をこのように書いた一九四九年大島論文は、「あす」の「日本を背負う学徒諸君」へ希望を託して、明治革命以来の「ゆがめられた形を是正すべし」と然るべき敗戦革命の必要を促したのである。

## 十一、I O C 会議の舞台裏

実は「必要」を促してから十年目の「一九五九年四月一日」までの大島「駿台スポーツボス」は日本体育協会との関係において「蚊帳の吊り手論争」(大島造語)をめぐって犬猿の仲だった。一九七六年大島回想に訊ねてみる。

東京招致運動が本格化してきた五九年春、田畑氏からボクにモスクワはじめ東欧のI O C 八票を獲得するため飛んでくれないかとの要請があつた。戦前の「鰻香オリンピック」の苦い思い出があつたせいだろう(東京に決まった第十二回オリンピックを日中戦争で返上した)。「もう一度日本で」の思慕がいつも心の底にあつた。一方子供たちにどうしてもオリンピックの姿を見せたいという願いがあつて蚊帳の吊り手論争をはなれての要請を受けた。それはとにかく帰国するとずっと選手強化を手伝う破目になつた。(傍点今次)

余談だが引用文の鰻香とは「ウナギのニオイばかりかがせ食わせてくれない」の喩えで「オリンピック返上」を擲している。前述のとおり一九五八年の体協はレームダック状態を自演していた。そのため招致運動の担い手「日本体育協会」は表立った活動ができない。だから大島が「誰にも思いつけない救いの手」を差し伸べた。毎日新聞の小さな無署名記事「全世界のメダリストに呼びかけ」(一九五八年十二月二十一日朝刊)が光彩を放っている。

オリンピック大会を東京に招致しようと、往年オリンピックで金銀銅メダルを獲得した日本の全メダリスト六十六人で「日本オリンピック・メダリストクラブ」が結成され、この創立総会が二十日西銀座の交詢社で開かれた。高石I O C 委員、古橋オリンピック青年協議会会長らも臨席、内外に向かつて積極的に動くために今後の方針を決めた。まず各国のメダリストに「一九六四年に東京で会おう」という趣旨のあいさつ(大島はこれをクリスマスカード作戦と命名)を送るなど、来年五月ミュンヘンで行われるI O C 会議の空気を有利にする運動を展開す

るとともに、国内的にも招致の機運を高めるためアピールを行うことになった。(補注傍点今次)

記事は大島以外に書ける内容でない。実は大島が結成呼びかけ人だった。古橋広之進を来賓に招いたのには一心同体「スポーツする心」を演出する仕掛けがある。先立って大島は青年有志に働きかけ「オリンピック青年協議会」を立ち上げさせていた。大島は舞台と陣容を揃えて行動する。行動は世界基準で展開される。戦前から経験してきた大島「オリンピック運動」は時代と社会の要請と打つべき現実的な布石を見誤らない。実践論理が戦う核としてスポーツする心を結集させたのである。結集「救いの手」の成果はミュンヘンIOC総会の現地から送稿された大島論説記事「IOC会議の舞台裏」(一九五九年五月三十日・毎日新聞朝刊)に訊いておくのが適切であろうか。

会議直前に私は東欧を回ってきたが、現地ではつきり東京の優勢を知った。こんな地ならしができていたうえに(ミュンヘンIOC総会での)最後のダメ押しもすばらしかった。二十五日に行われた平沢和重代表の演説は完全に他を圧倒した。簡にして要を得た演説で、わずか十五分間。勇敢にも従来の型を破って持ち時間の四十五分をフルには使わなかった。この戦略は高石IOC委員の指示によるものだった。(補注傍点今次)

圧倒とは教科書『小学校国語六年上』をかざし「日本では小学生にもオリンピック精神が説かれてい」と力説したことをいう。教科書には一文「五輪の旗」が載っている。監修者「志賀直哉」が大島著述から抄出したものである。自分事なので大島は経緯を語らない。一部始終を知る高石真五郎が平沢演説を創出させた経緯がある。

日本の少年たちは「オリンピックをぜひ東京に」と各国の委員に心のこもった訴えの手紙を送ったが、これ(大島演出の招致運動の一環)が関係者にどれだけの感動を呼び起こしたか想像に余りあるものがあった。高石IOC委員も日本の少年たちが各国IOCにアピールした力(集票)を大きく評価している。オリンピック青年協議会と少年たちが相談して、少年たちは「おこづかい」を郵便代にして送った。(同前、傍点補注今次)

こうして「東京一九六四」が一九五九年五月二十六日のＩＯＣ総会で決まった。ここに真相の深層「現実把握」を記事に残す凄さがある。凄さは「あす」への展望をも明示する。一九五九年大島論説記事は次のように結ぶ。

日本は世紀の祭典をあと五年の後にひかえて、きょうからでも準備（選手強化）をはじめなければならない。六千人の世界の選手を迎えて彼らと最後の決勝まで戦うことこそ、お客に対する一番の歓待だ。（傍点補注今次）

田畑は前以て一九五九年四月一日に理事へ復帰し、大島初の理事就任も同時だった。準備（選手強化対策）は「大島にしかできない」と算段する田畑が要請したのである。それから七年間に限って日本体育協会と駿台スポーツボスの「オリンピック休戦」が成立する。招致決定二ヵ月後の一九五九年七月二十七日、参議院議員の津島寿一が政権の意向もあつて空白の体協会長に就任し日本体育協会も活動を再開する。その十日後の一九五九年八月五日、オリンピック後援会の元事務局長佐藤昇が「後援会募金の不正使用」で逮捕される。実に逮捕は積年のウヤムヤを葬る政治決着である。一方で一連の隠蔽工作を東京五輪招致決定の高揚感に包まれた時代精神は追及しなかった。むしろ黙認したのである。かくも近代化「進歩成長」路線は人心を一様化させる。ここに近代化路線の隘路がある。

## 十二、蚊帳の吊り手論争に籠められた存念

一九四九年八月十六日、日本の時代精神を戦前思想「追いつけ、追いこせ」へ逆戻りさせる事件が起こった。米国ロサンゼルス開催の「全米水泳選手権大会」に於いてである。この国際進出は戦後初の出来事だった。招待選手古橋広之進が一五〇〇以自由形の驚異的な世界記録「十八分十九秒」を樹立し、占領下の暗く抑圧的な世相にあった時代精神を反転させて、日本のジャーナリズムまでもが戦前論調「勝った、よかった」へ回帰してしまった。

日本人のスポーツに対する根本観念の問題である。それに感情が伴う場合、これはもう一層厄介なことになる。

要は後進資本主義国家としての日本の焦燥が先進資本主義国家に追いつこうとした明治維新以来のあの気狂いじみた努力が、ほとんど意味がなかった、方向が逆であったと解った今日、再び意味もなく昔と同じ方向に眼を向けていて、国際試合でとか、オリンピックとなると旧思想に囚われ勝ちだということである。<sup>(22)</sup>

一九四九年十二月一日発行の大島論文「スポーツと文化」がその回帰現象をこのように痛烈に批判した。実は古橋快拳を演出したのは当時の日本水泳連盟会長の田畑政治である。こうして大島と田畑の「論争」が始まる。

だがスポーツ振興の方策で二人の意見が違っていた。田畑氏の見解はカヤの吊り手を上げると自然底が広がるだった。だがボクは底を広げることが第一その上にエリートスポーツの構築論だ。(一九七六年大島回想)

こうして古橋快拳に勢いを得た田畑は蚊帳の吊り手「浮揚」論を掲げ日本体育協会での地歩を固める。この論争を契機に大島「駿台スポーツボス」は日本体育協会の「理念の足らず」を糺すため対決姿勢を鮮明にした。対決は前出の平沼亮三とも無関係でない。振り返れば大島「スポーツする心」の布石は、一九四六年に始まっている。

戦前スポーツの実際は日本資本主義を母体とする社会環境の生んだ奇形だが、勝利追求に急な余りこれを矯正せず変質形に追い込んだ事大主義的失敗はこの際断じて繰り返すべきでない。われわれがスポーツ界に声を大にして叫ぶことは「スポーツは大眾に基盤をもつて育成促進せよ」ということだ。崩れかけたピラミッドの尖端(蚊帳の吊り手)だけをながめて回顧し弱弱しく「復興」をさげふ愚人の夢を継つてはならない。<sup>(23)</sup>(傍点補注今次)

一九四七年一月四日、大島は論説記事「スポーツ界の展望」を書いて自らへの命題「スポーツで何ができるのか」をこのように表明した。こうして着手したのが新しい生活文化「レクリエーション運動」である。一九四五年十二月二十五日、一方で平沼亮三を会長とする大日本体育会が復活した。斯くして平沼発議が連合国軍総司令部(GHQ)の同意のもと民主主義時代に相応しい新しい「国民体育大会」を創始させた。第一回国民体育大会は一九四六年十一

月の開催だった。GHQを説き伏せたのは平沼發意「スポーツによって青少年に希望を与える」に拠る。他方で第一回国体を取材した大島が新しい、「文化的デザイン」を提示して平沼を説き伏せる。斯くして実現したのが一九四七年に始まる「第二回国民体育大会」と「第一回全国レクリエーション大会」の画期的な連携開催である。

かくて心ある者は過った戦前のスタートを切り直し、ピラミッドの基底を固めるため一から始め「れんが」を運ばねばならぬ。視角を変えれば国民生活の中へスポーツ的要素と文化的素材が織り込まれることだ。(同前)

大島は一九四七年論説記事にこうも書く。ところが一九四六年十一月二十六日、平沼がGHQの公職追放に遭って会長辞任となる。実は戦中の大政翼賛団体「大日本体育会」時代のままの名称が公職団体と見做されたのである。この迂闊の責任は当時の文部省行政指導の不備や体協幹部の偷安にある。しかし平沼人望は絶大だったので一九四八年に「財団法人日本体育協会」(東龍太郎会長・田畑政治専務理事)へ転身しても大島「尖端と基底の環流」構想は支持された。だが古橋快拳を契機に体協が尖端至上主義へ豹変する。結果的に一九五〇年に大島構想が頓挫した。おりから朝鮮戦争(一九五〇—一九五三休戦)での特需景気が始まって時の吉田茂首相までが「これは天祐だ」と政策頼みにする。国民もこの倒錯「もの見方」を不都合だとは思わなかった。そして戦争責任国の反省「敗戦革命」を放棄し「政治・経済・教育」までもが戦前思想「追いつけ、追いこせ」へと回帰してしまった。大島がそう見通す。

ここでは本章のテーマ「蚊帳の吊り手論争」が問いかける大島存念の源泉を見定めておく必要がある。一九三五年ラジオ演説で提示されたクーベルタン「吊りさげピラミッド」構想を参照すれば大島存念が鮮明に見える。

「…一〇〇名の者(基底)がその肉体を鍛えるためには、五〇名がスポーツをする必要がある。五〇名がスポーツをするのには、二〇名が専門化する必要がある。二〇名が専門化するのには、五名(尖端)が優れた高い技能(および精粹の騎士性)の持ち主であることが必要である…」(大島邦訳書二〇三頁・傍点補注今次)

ピラミッド構想は尖端「五名」を立ち上げるために構想されたのではない。逆なのである。そもそも一八九二年のクーベルタンは、一九四七年大島論說記事の問う「大衆スポーツ」を、既に達成目標「二〇〇名の者(基底)」として見立てていたことになる。吊りさげピラミッド構想は一九三〇年九月十三日に開催されたジュネーブ国際教育会議で発表されたテキスト「スポーツの改革に関する原則」の一翼である。そのさい各国語に翻訳され、構想を「オリンピック標語の前提条件にすべきだ」と説くクーベルタン提案が承認された。大島邦訳書では次のように続く。

「：競技を拘束し抑制しようとする考えは夢にすぎません。スポーツの帰依者たちは拘束のない自由を求めているのです。それでここにひとつの標語ができています。『キティウス Citius』『アルティウス Altius』『フォルティウス Fortius』、すなわち『及ぶかぎり早く』『及ぶかぎり高く』『及ぶかぎり強く』であります。この標語は、あえて記録を破ろうとするすべての人に与えられているのです。」(同前・傍点今次)

大島意訳「及ぶかぎり」は雄弁である。一般的に「より速く、より高く、より強く」と和訳されるのだが、標語として語られるとき、近代化「進歩成長」路線という価値基準「ものの見方」の変換装置が歪曲させてしまう。即ち相対的な到達目標「誰よりも」を被せ、世界一を目指すかのように誤用する。とりわけ高度経済成長期に入ってから日本では競争原理のもとに読み替えてしまった。その誤認を一九四九年大島論文「スポーツと文化」が糾す。

たとえば他よりも早く走る子供、他よりも高く跳び、遠く跳ぶ子供は多くの子供に比してそれだけ広い世界を支配するのは当然である。その子供には他に比して別の世界があるのである。これを裏返して見るならば、その能力によって、また別の能力の増強伸長によってドンドン新しい世界が拓けてくることを物語っている。個々の人間が、それぞれ別の未知の世界に踏み込んでゆく、潜在する無限の能力を伸ばしてゆく、自己の発見と共に、他の世界を探究してゆく。ここにスポーツの価値があるのでなからうか。青白い輩(学者や作家)が文化性なし

といふ、スポーツに文化の二字を冠したのも、実はここに論理的締結があったからである。わたしはこの意味でスポーツ文化が（敗戦革命の只中において）今ほど強調されるべきはないと思う。（四七頁・傍点補注今次）

十二月一日発行のこの論文では斬新な視点「スポーツ文化」を発表した。察するに大島「尖端と基底の循環」構想が反故にされた直後だったとみてよい。斯くして体協を「文化性なし」と糾弾したことになる。大島一文が続く。

このように見るならば古橋の世界記録は人類最高の能力を実現した点——自分の潜在する能力を引き出して、その支配する世界の広大さを世に問うた点で大きな文化的意味をもつものであると思う。さてこのとき日本のスポーツと体育が重大な岐路にあることは明らかだ。（同前・傍点今次）

このさい古橋快拳の文化的意味とは「子供」への影響力に尽きる。オリンピックズムの核心も「子供」への眼差しにある。ところが一九四九年の体協は尖端主義に転じてしまっていた。右に大島の問う「岐路」とは戦前思想へ逆走する時代精神への訣別を促す意志の問題なのである。なぜ大島の洞察力はこうも深遠なまでに凝縮するのだろうか。

### 十三、負の連鎖を見誤らない洞察力

大島の洞察力は六年間におよぶ特異「死線のドイツ」経験の介在しないとき熟成するはずもなかった。一九三九年三月一日、大島が声明書「國際學生大會へ選手を送れ」<sup>24</sup>を書く。日本陸上競技連盟編輯誌『陸上日本』に載っている。連盟会長の平沼亮三に読ませるためだった。大島の要請は鋭い。一九三六年締結の日独防共協定に関連させ「本計画の強みはハーケンクロイツの国」へ「文化挺身隊として突撃する」ことにあると書いた。遠征資金を平沼が調達すれば、政府も軍部も反対できない論理的根拠「環境整備」を前面に押し出したのである。大島はこうも強調する。

（要請事案は）一九四〇年のヘルシンキオリンピックにわが代表選手を派遣するか否かの問題とは別個に考慮さ

るべき質のもので、時局が例えオリンピック選手団の編成を困難ならしめる事情を解消しないとしても、今回のドイツ行だけは決行すべきが防共紐帯国民としての義務履行であると考える。(同前・補注傍点今次)

平沼は東京五輪返上に際し日本スポーツの国際的位置づけを損なわないためにも代替え五輪への選手派遣を主張していた。政府も世論も日中戦争に臨む不如意を理由に反対である。だが平沼は「ドイツ行」だけは説き伏せた。そのさい大島は五年前の平沼「毅然とした態度」を想起したはずである。一九三九年六月十日、大島は監督に選任され学生選手団十二名編成で門司港から出航した。顛末は既に書いてある。とりあえず平沼から託された使命「ヘルシンキ大会参加の環境整備」はカール・デイムの後押しもあつて成就した。信頼のおける年表が一九三九年八月十八日の事項に「体協、翌年開催のヘルシンキ五輪に精銳主義で参加を決定」と記録している。一九四〇年に六十名編成の日本選手団をドイツへ送る。日独親善大会後にヘルシンキ大会へ参加する。翌一九四一年には日本がドイツ選手団を迎える。大島交渉成立の内容である。大島三十歳。青年意識が使命を達成させたのである。

ヘルシンキ五輪中止のI.O.C.通達はドイツ軍ポーランド侵攻八カ月後の一九四〇年五月二日だった。オリンピック休戦を探る環境整備が進行していたことになる。他方で一九四〇年冬季五輪札幌大会の返上に応じたのはドイツだった。一九三九年六月九日に冬季五輪ガルミッシュ大会の組織委員会が結成され、ドイツ軍侵攻後も国内外の環境整備に奔走している。大会返上は大戦勃発三カ月あとの一九三九年十一月二十二日だった。大島は戦況現場ですべてを見聞した。このように戦争回避を模索する歴史編纂への努力は掘り起こせば見えてくる。このような迫真「現実把握」の体験者は大島以外の日本人に存在していない。斯くして生命原理の深遠な洞察力を培養させたのである。一九四五年八月一日、大島が教奇な運命を乗り越え日本へ生還した。一九八二年大島回想が決意を語っている。

内地にいたら赤紙一枚の徴兵。太平洋の孤島でビルマかで戦死していたはずである。そう思うと、この「死に損

ない」は「やりたいことは、何でもやってやろう！」とその後の生き方を決めた。(一七六頁)

近代化路線の最大の過誤は戦争である。戦争の最大の犠牲者は青少年である。大島の発見した戦争責任国「日本」の歴史的現実が眼前にあった。大島三十六歳。青年意識が新たに奮い立つ。こうして命題「スポーツで何ができるのか」を掲げ、孤高の敗戦革命「青少年育成運動」に没頭することになる。しかしながら近代化「進歩成長」路線に追いついてはならない。だから一九六二年大島随想が時代精神「マイナス防止を怠る儉安」に対決して寸鉄を打ち込んだ。

本稿は一方に「田畑政治と東龍太郎」を、他方に「大島鎌吉と平沼亮三」を対照的に捉えて議論してきた。即ち前者を「プラスの増」に、後者を「マイナス防止」に、それぞれ視点をおく代表者に見立てて考察してきた。生命原理の文化運動が発祥する過程には時代の社会的要請がある。そのさい根柢のすべては、オリンピック運動に倣うとき、オリンピックの原理「マイナス防止の歴史編纂」と等質のはずである。この原理の欠如するところ例えば日本体育協会の視点も功利主義「金メダル至上目標」に固着する。大島は尖端だけに視点をおく何者をも許さない。とはいえ批判するだけではない。日本の将来を洞察する展望を必ず明示して行動する。一九七六年大島回想に検めてみる。

思うにカヤの吊り手論争(大島と田畑の対立)は、どうやら双方が両極端に立って互いに主張を譲らなかつたので延々とつづいた。そして中間地帯が大きく広いことに誰も気づかなかつたようだ。(補注傍点今次)

あらゆる領域の中間地帯が自覚しないことには現代社会に潜む三重の危機問題「鵜呑み・無批判・儉安」を克服できない。克服は「だれ」と「なに」のためなのか。そして実践課題は「だれ」と「なに」に託されているのか。いずれにせよ現代人は近代化路線の隘路「負の連鎖」を見誤ることのない確かな洞察力の発現を試されている。

大島邦訳書は一九六二年大島随想が公開されてから四十四日後の出版である。二つの著作の因果関係をどう読み解

くのか。大島が「一九六二年六月」の記述と断つて書いた「訳者のことば」の一節に注意したい。

(スポーツを毒する行為を阻止し) 人間形成の手段としてのスポーツ本来の姿を蘇らすことが、現代のオリンピック競技の使命であると考えられる。こんな意味でクベルタンの回想録は、典型的スポーツ精神の記録であり、オリンピック思想の力の証人であるばかりではない。実に文化史的記録である。彼が宣言した理想を文字に移した哲学書でもある。古代ギリシアのオリンピック思想は、一時一〇〇〇年の間、人類の歴史の中から消えた。だがそれがクベルタンという一人の人間の精神によって再び近代に蘇生した。ここに現代に生きるわたしたちは、体育・スポーツをどう考え、近代オリンピック競技を世界の平和と、社会と教育の中にどう位置づけ、どう意義づけるか、新しいしかも厳肅な課題の前に立たされたと感じるのである。(大島邦訳書四頁・補注傍点今次)

一九六二年大島随想が「一九四九年以降の体協幹部」に対し「理念に向かつての努力が要請されている」と反省を求めた。大島が公器「活字」を以て「だれか」と「なにか」を糾弾するとき、問題提起「救いの手」を必ず差し延べる。右の一節もそうである。一九六〇年一月十八日、選手強化対策本部の責任者として大島が着任した。その後六年間を共に働いた当事者には、「厳肅な課題」を「体協のあり方」に置き換えるなら、「だれ」に「なに」を期待しているのか直覚できたはずである。文化運動として日本スポーツを振興すべき「日本体育協会」には大いなる可能性が潜在している。ゆえに可能性を発掘せよと大島が終生に亘って追及した。誰かが応えるためには負の連鎖を見誤らない洞察力を働かせる必要がある。そのさい大島邦訳書を読み熟せば文化的デザイン「救いの手」が現前してくる。

### 結語

NHKが「東京二〇二〇」を念頭に置いて「大河ドラマ二〇一九」を制作中である。戦前と戦後の観点から「オリ

ンピックにまつわる逸話」をドラマ仕立てで描くらしい。戦後篇では「東京一九六四」を主題とし「田畑政治」を中心にオリンピック群像を描くという。だが大河ドラマが戦前思想の虚構を無視し一九六四年に結びつく時代と社会の成功体験を特化して脚色するのであれば、嘶として成功してもNHKの公的責任からすれば禍根を残すことにならないか。そうであれば大島の問う実質的な敗戦革命（近代化路線の反省）がさらに遠のく。このさい禍根とは三重の危機問題を先送りさせる「メディアの拘束力」をいう。メディアもまた反省しなければならぬ責任がここにある。

金メダル十六。世界第三位。確かに一九六四年の東京五輪は成功裡に終始した。成果は大島の率いた選手強化対策本部の功績で、代表選手「三五七名」の青年意識を引き出した結果である。マスコミや関係者も「そうだ」と評価する。けれども本稿の議論してきた「大島布石」の数々については語られることがない。なぜなのか。

東京大会はほんのステップストーン（日本のスポーツ元年）に過ぎなかった。わたしたちは大会が終わった途端に、目の前いっぱい二本の柱、すなわち「競技力の今後の強化向上」（尖端）と「国民スポーツの振興」（基底）がとつともなく大きな姿（基底と尖端の環流構想）で迫っていることを発見したのである。<sup>(26)</sup>（補注傍点今次）

大島が一九六五年一月一日に終刊となった日本体育協会の機関誌『オリンピック』にかく書いた。そして一九六五年三月三十一日発行の『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』を置き土産に体協理事を辞任。上述の「中間地帯の問題」に乗り出すためだった。一九六五年四月一日、大阪体育大学の副学長兼教授に就任し活動拠点を大学に定め直したのである。一九六五年十月二十五日、大島「日本のスポーツ元年」構想が対決姿勢を改めて表明している。

我国ではスポーツの教育における地位はまだ低いといえる。スポーツは人類の共通の文化財というのに、これでは文化国家といえません。オリンピックが近代に芽をふいたのは何故か、キリスト教とオリンピック精神の歩みよりをどうみるか、学界と文化界も考えてほしいものです。やがてスポーツはそのあるべき地位をとりもどすです。

よう。それまで待てないのが、現場にある我々の考えです。次の世代の担い手である子供、青年のため、日本の政治、経済、教育を動かすのが私の仕事（生き方）だと思っています。<sup>27</sup>（傍点補注今次）

オリンピックもレクリエーションも大島布石にすればスポーツを媒体とするマイナス防止の文化運動である。しかるに日本体育協会は現在に至っても文化的デザイン「尖端と基底の環流」の視点において不作為に終始している。オリンピック運動の総本山「JOC」も金メダル至上主義にかまけている。政治と経済は成長志向にしか関心を示さない。教育と社会は巷間に溢れる過剰な対象論理「物質主義」に無頓着である。これでは文化国家といえないし、日本のスポーツ元年も定着しない。はたして学界と文化界は現在なお過剰な「プラスの増」を追い求める「政治、経済、教育」を如何に捉えているのか。そして、この拘束を解消させる実践課題「生活文化」は誰のために必要なのか。

第十八回オリンピックアード「東京一九六四」のスローガンは「世界は一つ」だった。アジアで初開催の意義と希望も籠められているが、本稿の議論からすれば大島鎌吉の問う戦争責任国「日本」の責務と使命を世界へ表明する然るべき敗戦革命の「意志と象徴」とも読み取れる。検めるなら、オリンピックズの哲学的原理に基づく「マイナス防止の歴史編纂」に照らしても、戦後日本の発信として含蓄がある。他方でそれから五十六年後となる第三十二回オリンピックアード「東京二〇二〇」の大会ビジョンには戸惑いを隠せない。その後段では「史上最もイノベティブで、世界にボジティブな改革をもたらす大会とする」と謳う。まるで近代化「進歩・成長」路線を代表する看板のようではないか。また前段に掲げる惹句「一九六四年の東京大会は日本を大きく変えた」には生き方「もの見方」の問題として反、偷安、思考「もう一度省みよう！」が抜け落ちている。ここでは大島箴言をふたたび書いておくだけにしたい。

「近代化のプラス志向だけを深追いしては駄目だ。マイナス防止を怠るな。怠る偷安を許すな」

## 註・文献

- (1) 大島鎌吉(一九六六)「当時のレクリエーション協会の抱負」(『二十年史』・七七一七八頁)、日本レクリエーション協会。
- (2) 北澤清(一九六九)「IOC委員の二十四年」(『高石さん』・二五九―二六四頁)、高石真五郎刊行会。
- (3) 大島鎌吉(一九六二)「もう一度省みよう!」(東龍太郎著『オリンピック』・八六―八七頁)、わせた書房。
- (4) 大島邦訳書(一九六二)カール・ディーム編・大島訳『ピエール・ド・クベルタン オリンピックの回想』、ベースボール・マガジン社。本文中には「大島邦訳書」と書いて、「大島邦訳」という視点に意義のあることを強調する。
- (5) 大島鎌吉(一九七六)「日本のスポーツの風土をさぐる」(『新体育』一月号・巻頭言)、新体育社。
- (6) Navaille(1975), *Comments on the Olympics Memoirs. Olympic Memoirs by Pierre de Coubertin*, pp.3-4, IOC(1979)。
- (7) この問題は拙稿(文献番号一)に詳述してある。先行研究「文献番号一」における議論は当該随想を軸にして展開した。
- (8) 大島鎌吉(一九四九)「近代オリンピックの検討」、『探究』(第一〇号・五四―五九頁)、五五頁、法政大学学友会雑誌部。
- (9) 東竜太郎(一九六二)『オリンピック』、わせた書房。
- (10) 大島鎌吉(一九六九)「野津さんとの出会い」(野津謙編著『野津謙の世界』・二二―二七頁)、国際企画。
- (11) 第3回アジア競技大会組織委員会(一九五九)『第3回アジア競技大会報告書』
- (12) 東京都(一九五二)『一九四〇年第十二回オリンピック東京大会―招致から返上まで―』、一七頁。
- (13) スポーツアカデミー(一九七二)「郷土のオリンピック選手を追って」、九頁、体力づくり指導者協会市川県支部。
- (14) 大島鎌吉(一九三三)「近代オリンピックに就て」、『学報』(二〇三号・十月十五日)、二二頁、関西大学。
- (15) 岡邦行(二〇一三)『大島鎌吉の東京オリンピック』、東海教育研究所。七四頁の岡記述は「伊藤」を取材して読み出した内容を構成したものである。岡著書は大島を語り得る「最後の生き証人」の言説を書き留める貴重本である。伊藤は二〇一四年に逝去。「選手村の食堂」の件は伊藤からの取材で判明したと「新発見であるかのように」に本稿筆者(伴)に語っている。
- (16) 大島鎌吉(一九六四)「オリンピックで大切なことは戦うことである!」、『オリンピア』(五月号・巻頭言)、日本体育協会東京オリンピック選手強化対策本部。
- (17) 大島鎌吉(一九五五)「カール・ディーム博士の人と業績」、『体育の科学』(十一・十二月合併号・四二六―四三〇頁)、四二八頁、体育の科学社。

大島鎌吉のオリンピック運動(その五)

―一九六二年随想「もう一度省みよう!」の展望について―(伴)

- (18) IOC (一九九四)『国際オリンピック委員会の一〇〇年』、和訳版著作権者は穂積八洲男(第一章二〇〇八・第二章二〇一一)。  
本稿での引用は和訳版「NPO法人オリンピック・アカデミー公式サイトPDF」による。
- (19) 大島鎌吉(一九八二)『オリンピック平和賞』受賞に寄せて、『月刊陸上競技』(十月号・一七三一―一七八頁)、一七八頁、講談社。
- (20) Nivacela. 前掲序文(一九七五・文献6)、四頁。
- (21) 大島鎌吉(一九七六)「一億人の証言・金メダル15個を宣言」、別冊「一億人の昭和史・昭和スポーツ史オリンピック80年」、二二七頁、毎日新聞社。
- (22) 大島鎌吉(一九四九)「スポーツと文化」、『体育』(十二月号・四五―四七頁)、四六頁、金子書房。
- (23) 大島鎌吉(一九四七)「スポーツ界の展望(下)」、『毎日新聞』(一月四日朝刊・論説記事)。
- (24) 大島鎌吉(一九三九)「国際學生大會へ選手を送れ」、『陸上日本』(三月号・二四頁)、海と空社。
- (25) 岸野雄三ほか編集(一九九九)『近代体育スポーツ年表・三訂版』、大修館書店。
- (26) 大島鎌吉(一九六五)「あすに向かっの命題」、『オリンピック』(一月号、巻頭言)、日本体育協会。
- (27) 大島鎌吉(一九六五)「スポーツのあるべき地位」、『関大』(第一二七号)、関西大学校友会。